

令和7年度

## 教職課程

自己点検・評価報告書

福岡工業大学

令和8年3月

## 福岡工業大学 教職課程認定学部・学科（免許校種・免許教科）一覧

- ・工学部
  - 電子情報工学科（高一種 工業）
  - 生命環境化学科（中一種 理科・高一種 理科・高一種 工業）
  - 知能機械工学科（高一種 工業）
  - 電気工学科（高一種 工業）
- ・情報工学部
  - 情報工学科（中一種 数学・高一種 数学・高一種 情報）
  - 情報通信工学科（中一種 数学・高一種 数学・高一種 情報）
  - 情報システム工学科（中一種 数学・高一種 数学・高一種 情報）
  - システムマネジメント学科（中一種 数学・高一種 数学・高一種 情報）
- ・社会環境学部
  - 社会環境学科（中一種 社会・高一種 公民）

## 大学としての全体評価

本学の教職課程は、教員を志望する学生に対しての教員免許取得を保障するに十分な機能を果たしていると思われる。学生により添った支援が展開できている。ここ近年においては、教員免許状取得者のうち、教職を強く志望し、実際に教員になる割合がふえつつある。学生は、当然ではあるが、教員になることを強く求めて教職課程を履修し、教師になるための人間性・専門性・職業性をあざなえる縄のごとく、向上を図るために学びを深めている。本学教職課程は、学生達の学びのニーズに応える努力を続けていることが、全体評価としてあげられる。

本学教職課程は、教育愛と使命感に満ちあふれ、生徒に「人間の在り方生き方」の手本を示す存在となりうる教師を目指すことを標榜しており、そのため授業に臨む学生の姿勢態度（「立つ腰」の姿勢）・身だしなみ、また社会的ルールを厳守する第一義的な時間厳守等を厳しく指導し、またそれを特色としてきた。

令和7年度はこの厳しい指導を核としながらも学生の個性・適性を尊重し、学生一人一人の教師としての人間的魅力を引き出す指導に尽力してきた。

福岡工業大学

学長 村山 理一

## 目次

I	教職課程の現況及び特色	1
II	基準領域ごとの教職課程自己点検・評価	
	基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な 取り組み	2～3
	基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援	4～5
	基準領域3 適切な教職課程カリキュラム	6～7
III	総合評価（全体を通じた自己評価）	8
IV	「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス	8
V	現況基礎データ一覧	9

## I 教職課程の現況及び特色

### 1 現況

(1) 大学名：福岡工業大学 工学部 情報工学部 社会環境学部

(2) 所在地：福岡県福岡市東区和白東 3-30-1

(3) 学生数及び教員数（令和7年5月1日現在）

学生数： 教職課程履修 128名／学部全体 4,334名

教員数： 教職課程科目担当（教職・教科とも）9名／学部全体 149名

### 2 特色

本学教職課程では、2025年度には2年生59名、3年生42名、4年生27名の合計128名の学生が教職課程を履修している。さらに1年生の教職課程履修見込み者約80名を加えると200名程度が教職課程履修学生となる。教職課程の「教育の基礎的理解に関する科目」等及び「教育の実践に関する科目」は主として教職課程専任教員が担当している。「各教科の指導法」に関する科目は、社会科・公民科に関しては本学教職課程専任教員が、数学科、理科、情報科、工業科については主として非常勤教員が担当しているのが現状である。教職課程専任教員が担当する「教育の実践に関する科目」のうち「教育実習Ⅰ・Ⅱ」は、少人数で実施され、きめ細かな指導が行われている。福岡県及び福岡市教育委員会の策定する「教員育成指標」の養成期の指標を考慮しつつ、本学で設定されている「教育研究上の目的」（教員養成の目的）と教育目標（教員養成の具体的な目標）に基づき、指導を行っている。履修学生の多くが教職に就く意志を明確にし、教職課程の講義に臨んでいるが、自らの教職に対する志と外面に現れる言動・姿勢態度が乖離している学生も散見されるため、教職課程の履修学生には生徒に対して「人間の在り方生き方」の手本を示す存在となってもらようよう、将来の教師としての「自覚」と「覚悟」をもって、平素から努力することを求めている。4年次の教育実習までに、教師にふさわしい姿勢態度、服装、身だしなみ等を体得・体現しておくことを、（実習校から）求められている。今年度も、授業規律の確保と、教職学生にふさわしい言動、服装・姿勢態度、身だしなみの指導を行った。4年生には、教育実習事前指導において、模擬授業の授業力向上と指導者としての在り方について表裏一体的な指導を行った。

## II 基準領域ごとの教職課程自己点検・評価

### 基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

#### 基準項目 1-1 教職課程教育の目的・目標の共有

##### 〔現状〕

教職課程教育の目的・目標については、本学学生便覧の教職課程を記載しているところに目的・目標を掲げ、広く全学に周知を図るとともに教職課程専任の 3 名の教員を始め、全学的組織としての各学部学科を代表する教職課程委員会を通して共有を図っている。本学の教職課程は「教職の意義、教育の原理及び人間の発達を理解し、将来の教育者としての専門的知識、方法技術さらに実践的能力を高めるとともに、使命感及び倫理観と教育的愛情を育む人材の養成」を目的とし、設置されている。いずれの学部も教員免許取得が卒業要件とはならない開放制ではあるものの毎年履修者の約 2 分の 1 程度は教員として就職しており、また残りの者も将来的に教員としてのキャリアを考える者も多い。

小規模な大学であるため教職課程の規模も小さいが、各部局との連携を取りやすく、学生同士も教科を超えて交流できることが本学教職課程の特色であるといえる。

##### 〔優れた取組〕

特に工学部・情報工学部では、その専門性を活かして高度な知識や技術を取得でき、教員においても、本学の標榜する実践型の人材を輩出できている。

##### 〔改善の方向性・課題〕

学科の専門カリキュラムと教職課程との兼ね合いにより、多忙を極め途中断念を余儀なくされたり、教職の授業を取りづらい状況に置かれている学生も散見され、学科専門カリキュラムと教職課程との調和的な配置を求められる。

##### <根拠となる資料・データ等>

- ・資料 1-1-1 : 学生便覧、2025 年、pp.22-23

## 基準項目 1－2 教職課程に関する組織的工夫

### 〔現状〕

全学組織としての教職課程委員会を定期的に開催している。教職課程の運営については教務課との連携のもとに、教職協働で実施している。教職課程における履修指導については、教職担当（兼務）の教務課職員が、常時学生一人ひとりとしっかり向き合いながら入念な指導を行っている。教職担当教員も、1年次後期開講の教師論での講義内や、年度始め、学期始め等に適宜ガイダンス等を行っている。また、教務課との連携を密にしながら、学生の教職指導にあたっている。

### 〔優れた取組〕

本学の教職課程は、3名の教職課程担当教員を含む教職課程委員会が全学部全学科をまたがる一枚岩的組織として機能し、その意思決定のもとに、運営されている。

### 〔改善の方向性・課題〕

本学には、教職課程履修者専用の設備が少なく、多くが学科等と共有しているのが現状である。綿密で質の高い指導や、教職を目指す学生交流の場を確保する必要がある。令和6年度末に導入した電子黒板など ICT 機器のより一層の活用による、より時代に対応した実践的な指導ができる環境を整えていく必要がある。

### <根拠となる資料・データ等>

- ・資料 1－2－1：2025 年度教職課程委員会スケジュールについて

## 基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援

### 基準項目2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成

#### 〔現状〕

教職課程の履修については、1年次の後期の教師論を履修し、教師論の単位取得と教師論を除いて1年次に40単位以上を取得していることを必要条件として、教職を志す学生に教職課程履修の機会を与えている。学生の履修確保については、令和6年度より、1年次対象とした教職課程ガイダンスを6月中旬に開催するとともに、1年次後期の教師論で、現代学校教育の動向、教員の採用動向について、また、本学教職課程の教員養成教育の具体的展開について、加えて教職の魅力・醍醐味についても重点的に講義をし、教職課程履修へのモチベーションを高めている。1年次の2月に、教職課程履修登録に向けてのガイダンスを行い、そこでも入念に教職課程の魅力を伝えた上で、2年次からの教職課程履修登録を行う学生の確保に努めている。その結果、本学では毎年30名前後の学生が教員免許を取得し、10名前後の学生が教員として就職している。

#### 〔優れた取組〕

1年次、2年次、3年次の学生に対しては年度の終わりの2月に、また年度始めの4月には2年次、3年次、4年次の学生に対して、年次毎に対応した教職課程ガイダンスを入念に行い、教職に対する学びの意欲の保持向上を図るとともに、教職への職業的自己実現に向けての自己調整学習の促進を図っている。本学は小規模な大学であり、教職課程の人数自体も少ないというのが現状であるので、それを活かしてきめ細やかで一人ひとりに丁寧な教育や指導、相談などを行っている。学科教員も教職（への就職）を本学の魅力の一つと捉えており、教職課程の運営の協力体制が整いつつある。

#### 〔改善の方向性・課題〕

近年において、教職の意欲は高く、教師としての人間的な資質向上に努力をしている学生の中には、教科にかかわる専門学科の学習に苦手意識を持つ学生も散見される。今後は、より一層、専門学科の教員との連携を図りながら、人間性と専門性をより一層調和的に向上させていくことに、より積極的に取り組んでいきたい。今年度は紙ベースで運用していた履修カルテの電子化が整い2年次からの学年進行でその導入を開始している。

**<根拠となる資料・データ等>**

- ・資料 2-1-1 : 2024 年度教員免許状取得状況

**基準項目 2-2 教職へのキャリア支援****〔現状〕**

教職課程における履修指導については、教職担当（兼務）の教務課職員が、常時入念な指導を行っている。教職担当教員も、1 年次後期開講の教師論での講義内や、年度始め、学期始め等に適宜ガイダンス等を行っている。施設・設備については十分ではないのが現状である。免許取得後、さらに教職の専門的実践力を高めることを希望する学生や、小学校の教員免許取得を希望する学生には、福岡教育大学専門職大学院に進む道も提供している。福岡市や古賀市の学生スクールサポーター制度も積極的に活用し、教職を志す学生に、学校教育の現状について、学校現場で直に学ぶ機会を提供している。

**〔優れた取組〕**

令和 5 年度 2 月に福岡教育大学大学院との連携協定を締結し、福岡教育大学大学院への道が担保され、福岡県教員採用選考試験において、今までは合格が難しかった高等学校数学や高等学校公民、中学校社会で合格へとつながっている。福岡市教育委員会とは教員採用特別選考にかかる連携協定を結び、福岡市の教員を志望する学生への道を開いている。福岡県、北九州市、長崎県、熊本県等についても当該教育委員会の推薦制度を積極的に活用している。

本学附属城東高等学校の教員を 4 年次の教育実習事前・事後指導の授業や 3 年次の生徒・進路指導論、1 年次の教師論に招聘し、実践的講話を依頼し、学生の教職へのモチベーションアップにつなげている。

**〔改善の方向性・課題〕**

学生が主体的に自由に模擬授業を行うことができる専用の教室の確保が困難であり、加えて、模擬授業にかかる教科書・教材や設備・備品が不足している。できるかぎりの整備を進めていきたい。

**<根拠となる資料・データ等>**

- ・資料 2-2-1 : 大学推薦特別選考の詳細
- ・資料 2-2-2 : キャンパスメール (福教大教職大学院連携協定締結式)

**基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム****基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施****〔現状〕**

教育の基礎的理解に関する科目等については、1年次に教職課程の導入科目としての教師論を配置し、2年次前期には教育原理、教育の方法とICT活用、教育心理学、道徳教育論、2年次後期には教育行政学、教育相談の基礎、3年次前期には特別支援教育論、3年次後期には生徒・進路指導論、特別活動・総合的な学習の時間の指導法、4年次には前期・後期通年にわたって教育実習Ⅰ・教育実習Ⅱを、4年次後期には教職実践演習を開講している。教科の指導法に関する科目については、3年次に教科教育法Ⅰ～Ⅳを効果的に配置している。工業科については3年次前期に職業指導、工業科教育法Ⅰ、後期に工業科教育法Ⅱを、理科については3年次前期には理科教育法Ⅰ・Ⅱ、後期に理科教育法Ⅲ・Ⅳを、数学科については3年次前期には数学科教育法Ⅰ・Ⅱ、後期に数学科教育法Ⅲ・Ⅳを、情報科については、3年次前期に情報科教育法Ⅰ・Ⅱを、社会科・公民科については、3年次前期に社会科教育法Ⅰと社会科・公民科教育法Ⅰ、3年次後期に社会科教育法Ⅱと社会科・公民科教育法Ⅱを配置している。

**〔優れた取組〕**

毎年、教育実習の事前事後指導にあたっては、事前指導では模擬授業用の学習指導案集、事後指導では実習校での研究(評価)授業の学習指導案集を冊子化して、学生の事前事後指導の共通教材として活用している。

**〔改善の方向性・課題〕**

工業科教育法・情報科教育法・数学科教育法・理科教育法についての授業はすべて非常勤講師に依存している。したがって、それらの科目の時間割編成については夏季集中講義に設定せざるを得ず、学生の課外活動等に影響を及ぼしている。したがって、教科教育法に

かかる授業を学科専門教員による兼担を検討する必要が求められている。

#### <根拠となる資料・データ等>

- ・資料3-1-1：学生便覧、2025年、pp24-30

### 基準項目 3-2 実践的指導力育成と地域との連携

#### 〔現状〕

福岡市教育委員会との教員採用特別選考にかかる連携協定を結び、候補学生の推薦等を行っている。教育実習等の実施にあたっては、教育実習訪問指導担当の教職課程教員が実習学生全員の実習校と連絡をとり、査定授業参観及び学校現場教員との意見交換を中心とした実習校訪問指導を行っている。教育実習事後指導の一環として、学外研修を実施し、学外の社会教育施設（咸宜園研究センター等）の社会教育担当者と連携して特別活動実施能力の涵養を図っている。

#### 〔優れた取組〕

4年生を対象として、教育実習事前・事後指導、教職実践演習の授業において、本学附属城東高等学校の教務主任をはじめとする複数の教員をゲストスピーカーとして招聘し、学習指導や生徒指導、担任としての指導に関する実践知を高めている。加えて令和7年度からは1年次の教師論、3年次の生徒・進路指導論でも城東高等学校の教員をゲストスピーカーとして招聘し、学校教育の実践的学びの深化を図っている。

#### 〔改善の方向性・課題〕

教育委員会との連携による教員採用特別選考にあたっては、教育委員会によっては制度設計が短い期間に変更される場合があるので、その情報をしっかりとリアルタイムで把握することが必要となる。そのためにも教育委員会との密な連携を図ること、加えて他大学との教職課程に関する情報共有と知見の共有が課題としてあげられる。

#### <根拠となる資料・データ等>

### Ⅲ. 総合評価（全体を通じた自己評価）

本学の教職課程の特色は、「人間としての在り方生き方」の手本を示す存在としての教師を養成することであり、そのため、授業に臨む服装を含めた身だしなみ、姿勢態度、言動や挨拶の励行、授業や特別プログラムに臨む際の時間厳守等を学生に徹底して指導することに力点を置いている。そのようにして「鍛え・錬り・磨き」あげられ、指導者としてのぶれない軸の基盤を形成した学生が教職現場で一定の評価を受けてきた。また進学先の福岡教育大学大学院でもその成果が評価され、令和6年2月の同大学院との連携協定が実現した。

しかしながら、近年において、教職の意欲は高く、教師としての人間的な資質向上に努力をしている学生の中にあっても、教科の基盤をなす専門学科の学力が不十分な学生が散見されるようになってきた。著しい場合は、教職の授業科目は、着実に単位取得できても、専門学科の単位が取得できずに留年を余儀なくされ、教職を断念する学生も散見されるようになってきた。今後は人間性と専門性をより一層調和的に向上させていくことが課題となる。

加えて授業の実施形態では、論理的に説明する力や各教科の模擬授業等では演習形式の実践も当然必要になるため、より効率的で効果的な授業形態を模索したい。

本学の個々の教職課程履修学生には、個性に内在する教師としての潜在的可能性を大いに秘めている。一人ひとりの学生とより一層真摯に向き合い、その可能性をより多く引き出してゆき、将来の教師としての自己実現を図る支援を続けていきたい。

### Ⅳ 「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス

教職課程担当の3名の教員が協議の上作成し、その後、教務課と調整し教職課程委員会の議をへて完成とした。

## V 現況基礎データ一覧

令和7年5月1日現在

法人名 学校法人 福岡工業大学					
大学・学部名 福岡工業大学 工学部 情報工学部 社会環境学部					
学科・コース名（必要な場合） 工学部 : 電子情報工学科・生命環境化学科・知能機械工学科・電気工学科 情報工学部 : 情報工学科・情報通信工学科・情報システム工学科・システムマネジメント学科 社会環境学部 : 社会環境学科					
1 卒業生数、教員免許状取得者数、教員就職者数等					
① 前年度卒業生数					961
② ①のうち、就職者数  (企業、公務員等を含む)					848
③ ①のうち、教員免許状取得者の実数  (複数免許状取得者も1と数える)					25
④ ②のうち、教職に就いた者の数  (正規採用+臨時的任用の合計数)					11
⑤ のうち、正規採用者数					7
④ のうち、臨時的任用者数					4
2 教員組織					
	教授	准教授	講師	助教	その他 ( )
教員数	85	45	3	15	
相談員・支援員など専門職員数					